

松平忠誠

ただかね



松平家墓所（埼玉・天祥寺）

第81話

前回紹介した忠国に男子が無く、文久元年（一八六一）下野国（栃木県）烏山城主大久保家から養子を迎え、同三年名を忠誠と改め家督を相続させます。

忠誠が家督相続してまもなく、將軍家茂の上洛の御礼として朝廷への使者を命じられます。翌年この大役を終え帰国すると、今度は品川沖の第一台場の警備を命じられたり、同年水戸家の尊皇攘夷派、天狗党の乱の鎮圧にも出兵します。

慶応三年（一八六七）將軍慶喜の大政奉還後に大坂に到り、松平家の祖松平忠明が建立した大坂天満の東照宮ゆかりの建國寺に入ります。翌四年鳥羽伏見の戦いにあい、慶喜は大坂城を退去、江戸に逃げ帰ってしまいます。忠誠も和歌山を経て江戸に海路脱出します。この時建國寺と東照宮にあった宝物を戦火から守るために運び出し、忍の東照宮に奉納しました。

三月に入り、官軍である東山道征討軍が忍城下に入り、官軍に恭順するか否かの決定を迫られ、隠居した忠国の指導により恭順し、以後は官軍として東北地方を転戦します。

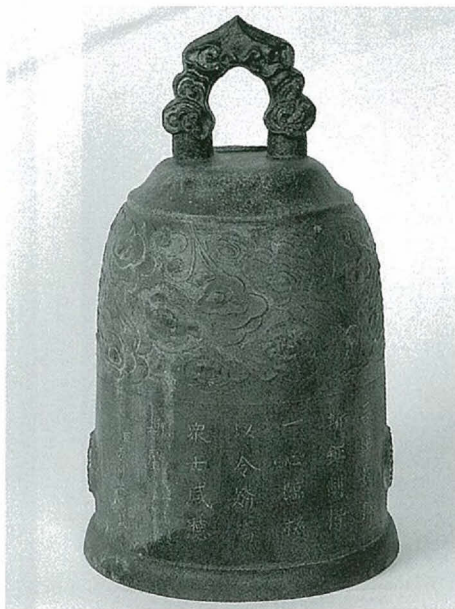
忠誠は、この間の心労がたたり病気がちになり、六月に病没します。忍松平家の養子となり家督を相続してわずか七年の短さでした。

忠誠の後を追うように七月には隠居の忠国も亡くなります。二人は、菩提寺である埼玉の天祥寺に葬られています。

芳川波山

はざん

第82話



波山の銘文を刻む 異国船警備陣屋の陣鐘

(館山市立博物館蔵)

文政六年（一八二三）桑名城から忍城に転封した松平忠堯は、桑名から移した学校「進脩館」に、病没した近藤棠軒に代わる指導者の推薦を幕府の儒官林述斎に依頼、述斎は波山を推薦し、波山も忍の招きに応じました。波山は、進脩館の再興に力を尽くすとともに、私塾も開き多くの家臣を薫陶しました。

天保一三年（一八四二）忍城主松平忠国は、異国船警備のため房総半島警備を幕府より命じられますが、この時波山も房総に赴き、家臣と共に任務に就きながら勉学の指導をしました。

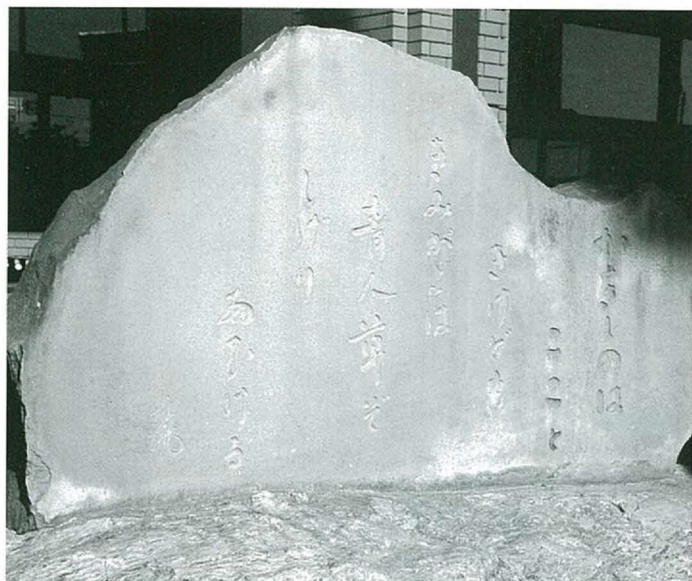
弘化元年（一八四四）病を得て忍に帰国します。翌二年波山は、幕府より中国の史書『東都事略』一三〇卷、『南宋書』六八巻の校訂を命じられ、翌三年一月に完成しましたが、二月二三日五三歳で没します。

波山没後、波山の養子芳川襄斎や波山の門人が中心となり忍松平家の教育は隆盛期を迎え、慶応四年（一八六八）には、進脩館よりやや対象年齢を下げた培根堂を設立、波山の子芳川春壽により同年洋学館も設立されます。教育の対象範囲を広げた培根堂からは明治期に活躍した多くの英才を輩出し、洋学館からは沢田俊三や青木輔清らの著名な洋学者が育ちました。変革の時代こそ教育とよく言われます。まさに幕末の動乱期、波山やその門人たちの努力により広められた教育の成果が、明治になり花開いたといえます。

黒沢翁満

おきなまろ

第83話



商工センター前の歌碑

寛政7年（一七九五）、伊勢桑名で黒沢重孝の長男として生まれました。父重孝の隠居によりわずか一三歳で家督を相続します。さらに一四歳で戯作を創作し、当時江戸で人気の戯作者山東京伝に添削を請いましたが、京伝は彼の文才に驚き、浮き草稼業の戯作者者よりも学問で大成すべきであると自ら手紙をしたため論じたと伝えられています。

二〇歳の頃より加茂真淵を深く敬慕し勉学に励み、国学を究めたといえます。文政六年（一八二三）松平家の忍移封に伴い、桑名から忍へ移ります。進脩館で国学を教授し多くの門人を持つとともに、用人として毎年半期ずつ大坂蔵屋敷に在番したため、大坂や伊勢にも多くの民間の門人を持ち、当代随一の国学者と評されました。著作には、国文法の教科書にあたる『言霊のしるべ』や自分の歌集の他に地方の歌人の応募作品を編纂した『類題採風集』、編さん物として『源氏百人一首』『難波職人歌合』等々数多くの著作が残されています。安政六年（一八五九）大坂蔵屋敷で六三歳で没し、大坂珊瑚寺に墓があります。

昭和三十三年に黒沢家があった、現在の商工センターの所に歌碑が建てられ、翁満が忍で詠んだ歌

武蔵野はこと聞けども君が代は

青人草ぞしげりあひける

が刻まれています。

田中算翁

さんおう

第84話



遍照院（駒形）にある田中算翁の墓

享和二年（一八〇二）桑名に生まれ、名を千村といい、算翁、方円堂、玉廼屋など多くの雅号を持っていました。算翁の家は代々松平家の家臣で、算翁も文化一〇年（一八一三）表坊主となり、文政四年には家督を継いで奥坊主になりました。

文政六年（一八二三）職を辞し学問に志しました。江戸に出て手内職をしながら苦学の末に、江戸時代に発達した日本独自の数学である和算を学び、また、天文、暦数（日月の運行をはかって暦をつくる方法）、地理、測量術も勉強しました。

さらに、国学を黒沢翁満に学び、和歌をよくし、万葉集に通じたといえます。文政一年（一八二八）翁満が桑名に父重孝を訪ねたとき、千村（算翁）一人を伴としていたことが、翁満の『伊勢日記』に出てきます。

やがて忍松平家に算術教師として迎えられ、培根堂、国学館で教鞭をとりました。培根堂は、進脩館より年少の若者を対象とする学校であり、国学館は、神仏分離により神官を再教育するために設立された学校ですが、ここで算翁から算術を学んだ多くの若者が、官吏、教師として育っていきました。

明治六年七二歳で没し駒形の遍照院に墓があり、進脩館芳川襄齋の撰文、書道教授の寺崎梅坡の筆、算翁の養子千縣の建石による墓誌銘が残されています。

吉田庸徳ようとく

第85話



吉田庸徳写真（郷土博物館蔵）

庸徳は、測量術に秀でた父を持ち、弘化元年（一八四四）に生まれ、田中算翁に算学、芳川春濤に英語を学び、さらに江戸に出て大島圭介の洋学塾で学びました。文久元年（一八六一）、わずか一八歳の時に算術書を、同三年には洋算の書を著してその名を知られるようになり、忍藩の学校である培根堂の教授になりました。

庸徳が著した本は多くありますが、中でも明治五年に刊行された『洋算早学』は、わかりやすく西洋流の算数を解説したもので、同年の「小学教則」で小学校の算数の教科書に指定されるなどベストセラーになり、翌年に第二編、翌々年に第三編が刊行されました。明治一〇年代にも『開化算法新書』『開化算法大成』など数多くの本を刊行し続け、明治初期の日本における数学の普及発達に果たした役割は高く評価されています。

掲載した写真は、庸徳二五歳の時の肖像写真で、ガラス湿板写真です。箱書きに、慶応四年八月八日、横浜弁天通五丁目蓮杖これを写すとあります。撮影者の蓮杖とは、長崎の上野彦馬とともに日本の写真の開祖といわれる横浜の下岡蓮杖であり、この写真は蓮杖の撮影したもので残されている数少ない写真の一つとして、現在写真史の中でも注目されているものです。

活躍を期待された庸徳でしたが、明治一三年三七歳の若さで病没します。墓は市役所近くの清善寺にあります。

植田養山

ようざん

第86話



植田家墓地（満願寺）

忍藩では庶民子弟の教育を担当する公的な学校は無く、いわゆる寺子屋てらこやがその教育にあたりました。忍藩で最大の寺子屋は野の玉松堂たましょうどうで、師匠は、植田養山直正でした。

養山が記録した「玉松堂日記帳」や「門入證文帳」などによれば、子どもは野だけでなく、屈巢、広田、百塚、袋などの比較的広い範囲から常時五十〜六十人が通っていました。

玉松堂では、入門を登山、卒業を下山といい、ともに二百文程度の謝礼と仲間入りとして赤飯や炒り豆を配る習慣があったようです。授業は、一斉授業ではなく、自習が基本で手習い、素読を中心に、日常生活に必要な計算も教えていました。

玉松堂には賞罰があり、成績優秀者や学業とともに生活態度の優秀な者に賞を与え、罰は生活態度の悪い者や不道徳な行為を対象に行われました。さらに農繁期や村の行事などに休日や昼限り、早仕舞いなどを設け、子供たちに積極的に参加させ、村の文化や習慣を学ばせるなど、文字の読み書きを中心にして農業に必要な知識やしつけ教育を実施しながら、将来の村を支える子供たちを育てることが養山・玉松堂の目的でした。

養山は江戸で学んだ後帰郷し玉松堂を開き、子供たちを育て、文久三年（一八六三）に没します。墓は満願寺にあります。

小川一真

かずまさ

第87話



小川一真

小川については平成一二年の秋、博物館の企画展で紹介しましたので、観覧された方も多いと思います。万延元年（一八六〇）忍松平家小普請組原田庄左衛門の二男として生まれ、のちに同じ小普請組小川家の養子となり、小川一真と名乗ります。学校は忍藩の培根堂で学びました。写真技術を学ぶために米国東洋艦隊「スワタラ号」で渡米、ボストンの写真館に勤務し写真技術を学ぶかわら写真乾板製法、写真印刷の技術を勉強します。

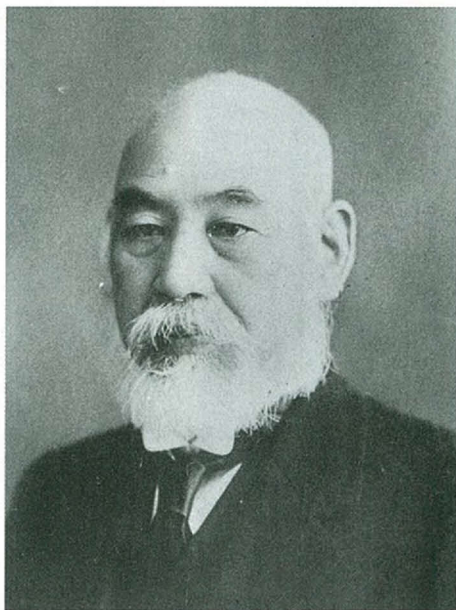
明治一七年（一八八四）帰国し、翌年東京麹町に写真館「玉潤館」を開設、写真師（写真家）として活躍します。また、小川は、アメリカで学んだ写真印刷の技術がわが国で初めて普及させるとともに、当時全て輸入に頼っていた写真乾板の国産化に取り組むなど、日本における写真文化の普及に大きな貢献をします。

そうした業績が認められ、明治四三年に写真師として初めて帝室技芸員に任命されます。帝室技芸員は、皇室が設けた芸術家の保護榮譽制度で、写真師が芸術家として認められたことを意味していました。

大正元年九月に明治天皇大喪の撮影を依頼され、同じ頃小説家夏目漱石の写真撮影もしています。この時の写真を元に製作されたのが今私たちが使用している千円札の漱石の写真です。昭和四年神奈川県平塚で没します。

小山健三

第88話



小山健三傳より

安政五年（一八五八）忍松平家臣小山宇三郎の長男として生まれます。学校は、藩校培根堂で学びました。幼少から頭脳明晰で特に算数には天賦の才能があり、明治四年には培根堂の数学助教を命じられます。この時までわずか一四歳でした。

後に東京に出て高等数学、化学、語学を学び明治8年からは教師として各地を赴任します。長野県師範学校、前橋医学校、長野県師範学校長、東京工業大学の前身である東京工業学校教授などを経て二五年には文部大臣秘書官となります。三〇年には東京外語学校の前身の外国語学校の創立に関与し、翌三一年文部次官兼実業教育局長を兼任しました。

しかしながら三二年四一歳の時、実業界に転身し大坂の株式会社三十四銀行の頭取に就任。以来二五年間に渡り三十四銀行を飛躍的に大きくするとともに、関西経済界の重鎮としてさまざまな場面で活躍し、大正九年には貴族院議員に勅撰されるなど「関西の渋沢栄一」とも称されました。

三十四銀行は、昭和八年山口銀行、鴻池銀行と合併し現在の三和銀行になります。昭和五年三十四銀行は、「小山健三傳」を出版し、前半生を教育者として、後半生を銀行家として活躍した氏の自伝を記録するとともに氏の事績を顕彰しています。大正一二年六六歳で没し墓は阿倍野墓地にあります。

湯本義憲よしのり

第89話



湯本義憲

小針の豪農田島新六の四男として、嘉永2年（一八四九）に生まれ、明治三年兄の死去に伴い生家に復帰。翌四年野村埼玉県令（知事）に学制改革を建言し容れられます。これが後の埼玉県の教育制度改革に大きな影響を与えました。九年には埼玉村の豪農湯本家の養子となり同家を継ぎ、一二年第一回県会議員選挙に当選、四期七年県議として活躍しますが病気のため辞任します。この間地元では足袋底を生産する「忍行社」を興し行田足袋製造業の興隆に尽くすとともに、一八年には、近隣の子供たちの教育のために小針に「盈進義塾」を開きます。

二三年最初の衆議院議員選挙に当選、第二回帝國議會に政府の治水制度の不備を憂い「政府自ら監督実行する」域に及ぼす工事一切の施工は、政府自ら監督実行する」旨の治水案を建議し可決されました。この建議は、大きな河川は国が直接維持管理するという後の河川法の骨子に引き継がれ今日に至っています。

以後も治水問題の指導者として活躍、三〇年には木曾川本支流の改修のために岐阜県知事に任命されます。翌年退官した後も民間人としてただ一人内務省治水調査委員に任命されるなどその生涯を治水事業に尽くしたといえます。そうした功績を顕彰するため、前玉神社に大きな頌徳碑が建立されています。

大正七年に没し墓は埼玉盛徳寺にあります。

松岡三五郎

第90話



「忍商業銀行四十年史」より

北埼玉郡第二代郡長松岡半六の長男として慶応三年（一八六七）に齋条で生まれます。前月号の湯本義憲等有志が設立した盈進義塾えいしんで学び、その後浦和中学校、慶応義塾、東京専門学校（早稲田大学）、英吉利法律学校（中央大学）などで学びました。

三〇歳で行田に帰郷し、行田の産業界の実状には銀行の設立が急務であると、小針の豪農田島竹之助、足袋製造の橋本喜助、青縞あおかじまの大沢九右衛門らを始めとする当時の行田の資産家を説得、明治二九年に現在のあさひ銀行の所に忍商業銀行を設立し、初代頭取に就任します。

当時の行田の地場産業である足袋製造は、春から夏場は暇で秋口から生産が活発化し売れて資金が回収できるのが冬場であり、年一回転の資金繰りでした。そのために製品を安く買いたたかれたり、借入金の高い利息の返済に苦勞していました。これは足袋の材料布である青縞や繭の生産についても同じで、三五郎は開店のあいさつの中で、今後は資金繰りの心配が無くなったことを高らかに宣言し、実際それ以後の行田足袋隆盛に大きく貢献しました。その後忍商業銀行は、県内有数の銀行に成長しますが、昭和一八年武州、飯能、第八十五銀行と強制合併させられ埼玉銀行となり、現在のあさひ銀行へと変わります。

若くして頭取となり、安定した資金供給を通して県北地方の産業発展に尽力しましたが、昭和五年六六歳で没しています。